



横浜さかえ内科通信

インフルエンザについて

インフルエンザは11月下旬から12月上旬頃に始まり、以後患者数が増加し、翌年4～5月にかけて減少していきます。インフルエンザウイルスにはA型とB型があります。1～3日間ほどの潜伏期間の後に、38

度以上の高熱、頭痛、全身倦怠感、関節痛などが突然現われ、咳、鼻汁などが続き、約1週間で軽快します。

高齢者と子供、慢性疾患のある人は要注意!

高齢者や妊婦は免疫力が弱く、肺炎を起こすことがあります。子供では抗体がない状態で発病することが多く、脳症が起きることもあります。喘息、心臓病、

糖尿病などの慢性病の人も重症化しやすいです。健康な方は短期間で治ったとしても、周囲の弱者にうつす危険性もあります。

インフルエンザの診断

綿棒で鼻や喉をぬぐったり、鼻をかんだりして、診断します。従来の簡易キットに加え、当院では写真の技術を組み合わせた高感度インフルエンザ迅速診断装置を導入しています(下写真)。これにより、診断能力は向上し、今まで診断に至らなかった初期インフルエンザの診断が可能です。

抗インフルエンザウイルス薬

治療には、抗インフルエンザ薬(飲み薬・オセルタミビル(5日間)、吸入薬



高感度インフルエンザ迅速診断装置

..ザナミビル(5日間)、ラニナミビル(1回)、点滴..ペラミビル(1回)が使われます。昨年よりバロキサビルも使用可能となりましたが、小児やA香港型患者で耐性ウイルスの問題があり、慎重に使用すべきとされています。抗インフルエンザ薬を発症後48時間以内に使うと、短期間で改善し、重症化を防ぎ、周囲の人にうつす危険性も減ります。

ます。体を温かくする、安静にする、水分をとるなどの対症療法も大事です。アセトアミノフェン以外の解熱剤は、ライ症候群(脳症+肝機能障害)のリスクや脳症発症時の死亡と関連していますので使用しません。抗インフルエンザ薬と子供の異常行動(2階から飛び降りるなど)が社会問題になりました。現時点で、抗インフルエンザ薬との因果関係は確認されず、インフルエンザ感染自体によるところもあるようです。療養開始後、少なくとも2日間は、子供が一人にならないようにしてください。

次のようなときは重篤な合併症の可能性があります

次のような時は、かかりつけの医療機関にご連絡ください。裏へ

